

## カーライルが見抜いたメキシコ



大垣 貴志郎（京都外国語大学 名誉教授）

メキシコの古代文明はペルーのそれと同様に謎に包まれた部分の解明に根強い関心が向けられているため、考古学上で待望されている発見や、人類学でこれまでと異なる学説が発表されると私たちの耳目は引き付けられる。しかし、親日的で悠久の歴史を包み込むメキシコや中南米について知りたいことは、社会の陰惨な事件が発覚したときに新聞等で報道されることはあっても、世界各地の情報が伝達されるような頻度で私たちに日常的には届かない。メキシコとメキシコ人をもう少しよく理解したいと思っていたところ、拙著『メキシコ 一時代の痕跡と歴史認識』（2023年）は刊行された。

スコットランド人の歴史家カーライル（Thomas Carlyle, 1795-1881）は、「世界の歴史は偉人の列伝だ」と考えた。どんな歴史でも列伝だけで記述されるものではないことは明白だが、メキシコの歴史家エンリケ・クラウセは、カーライルの歴史観に見事に合致する歴史や国もあり、その中でもメキシコは最もその歴史観に相応する国の一つであるという。たしかに、スペイン型の歴史秩序の崩壊はラテンアメリカにカウディージョの出現を招き、メキシコの歴史が大きく変貌する時期の原動力は英傑の登場であった。クラウセは「彼らは国難の時期や戦乱の最中を重厚な伝統（先住民文化、キリスト教文

化）の強力な引力と葛藤しながら、一刻の猶予も許されない状況で弾圧からの解放と経済の発展を追い求めなければならなかった。勇気と品位を示して抗しがたい宿命に立ち向かった典型的な英雄である」と述べて、カウディージョとは「元々、スペイン語の *cauda*（司祭の祭礼服の長い裾）から由来すると言われていて、丁度、ほうき星の長い尾のようなものを指す。しかし、実際は、ラテン語の *capitellum* から由来し戦場で指揮する頭目、司令官のような立場の人を意味するらしい。言葉というものはその単語を外国語の同義語で置き換えても、その意味合いが過不足なく伝達されることは難しい。ドイツ語の *führer* ではない。というのは全体主義的志向は含んでいないからである。また、単に英語の軍隊用語 *chieftain* でもなく、イタリア語の *capo* ではマフィアのボスの意味が出てしまう。同じイタリア語でも *duce* の称号は傲慢な響きがする。いずれの同意語でも意は尽くせない。英語の *leader* の意味に比較的に近いが、それでは世俗権力の掌握者に過ぎず、マックス・ウェーバーが言う、なかば神聖な領域内で支配力を発揮するカリスマの響きが充分含まれない」と定義している<sup>1</sup>。

一方、クリオージョ（植民地生まれのスペイン人）で保守派論陣の先鋒アラマン（Lucas Alamán, 1792-1853）は、メキシコの歴史

を理解するにはスペインの歴史に学ぶ必要があると強調していた。「スペインから我々の信奉する宗教を継承している。そして、その影響を受けた世俗的、宗教的なすべての管理・運営の秩序は長期間継続し、現在でもその大部分は保存されている。つまり、法体系や慣例、風習、分別は、我々にそれらが定着した原点を教え、また、我々の起源を評価させ、さらに、我々も国家の一部を形成していたスペイン国の誕生と発展、偉大さに加えてその衰退の原因まで検分させることになる」<sup>2</sup>。スペイン海外植民地を「木」だとすると、その幹はスペイン、「枝」は副王領で、枝の一角を占めるのがメキシコだと考えていた。さらに、スペインからの遺産を否定した独立国はあり得ないと独立戦争開始前に断言していた人物である。

メキシコ人についてオクタビオ・パスは『孤独の迷宮』（高山・熊谷共訳）のなかで「メキシコ人というものは己のなかに閉じこもって、身を守る存在のように思える。閉鎖性は、我々の猜疑心と不信感への一つの手段である。その顔が仮面であり、微笑が仮面である」と、メキシコ人の陽気な一面だけを知る者には意外なこの国の国民性について解説している。目に見えないすべての壁に対して仮面は防御として役立っているのかもしれない。さらに、「生皮

を剥がされた者のように、人生を生きていく。気難しい孤独の中に追いやられている。このような反応は、我々の歴史がどのようなものであり、また我々が作り出した社会の性格がどのようなものかということを考えれば、納得できるだろう」という<sup>3</sup>。それほど、歴史の襞は古代から現代まで幾重にも重ねられて、文明の重層国家の人々の心性に重くのしかかっているのかもしれない。

新著で問い返したかったことは、メキシコ人にとって「国」と「母国」の概念と、「先コロンブス期」についての歴史認識である。メキシコは、1521年にスペインに征服されると征服以前の歴史は「先コロンブス期」という歴史区分に一括して分類され、そのあとの3世紀間は1821年に独立するまで副王領時代というスペインの海外植民地の歴史に組み込まれた、歴史を切断されたような国である。そこで、この国の建国時期と、メキシコ人がアイデンティティを抱く母国の概念はどの時期に設定するのかを問いかけた。メキシコについて初めての通史と言われている『メキシコ世紀を越えて』（1889年）の編著者リバ・パラシオは、スペインがアステカ王国を滅ぼした1521年にメキシコの「国」は建国され、独立戦争が始まった1810年に「母国」が誕生したとして、副王領時代はメキシコの歴史に含めないと考えた。また、「メキシコは1821年に独立したが、過去のない国として誕生した。そのために、先コロンブス期と副王領時代はメキシコの歴史と結節点はなく、「国」の歴史は1810年の独立戦争開始時期から始まる。メキ

シコ人は宗教的にも人種的にも文化的にもスペイン人の遺産は継承しておらず、さらに、先コロンブス期の先住民の末裔でもなく、ミゲル・イダルゴの子孫である」と力説した、イグナシオ・ラミレス急進派自由主義者もいた<sup>4</sup>。これに対して、歴史家フスト・シエラはメキシコが建国された時期区分はリバ・パラシオ説に同意するが、「母国」の定礎とする時期に異議を唱え、スペインによる征服のあとに始まる副王領時代の開始時期に母国は誕生したと、『メキシコ、その社会の変革』（1907年）のなかで述べている。フスト・シエラによれば、「母国」は「国」より広義で政治体制のみならず文明体系をも含蓄した語彙であるという。この二つの考え方に、ガルシア・イカサルセタは、浩瀚な歴史書『メキシコの史料編纂全集』（1858-1866年）のなかで、アステカ王国の滅亡の年、1521年はメキシコの国の成り立ち時期だと述べて、母国の誕生はスペインから異なった制度と文化が伝播され人種が混血した副王領時代とした。「アステカ王国のメシカ人は、メキシコ中央高原をさまよい恐怖に満ちた好戦的な国家を築きあげて、神官政治と迷信に支配された国家と社会をつくり、さらに人身御供を強要しテノチティトランの神殿を都とする王国を築いただけで、アステカ王国の滅亡の年、1521年はメキシコの建国時期とした」<sup>5</sup>。これは「先コロンブス期」に一つの歴史認識を示したことになる。

新著でもう一つ問いかけたことは、スタンレー・ロス著『メキシコ革命は死んだのか』（中川・清水共訳）を読み返して、メキシコ

は革命精神を喪失したのか、持続しているのかという点であった。長い歴史的運動について、同著のなかでロペス・マテオス元大統領（在任1958-64）が述懐している。「1810年の独立戦争、1857年のレフォルマ改革、および1910年のメキシコ革命は、同一の国家構造が持つ異なった断面、すなわち、人間的自由、政治的自由、および経済的自由の表れであり、これらすべての自由はメキシコ人の願望である。この目標の達成に通じる措置が長期を要する場合には、効力は変化するし消滅するものであるが、革命の理念は現在まで生きている。そして将来においても、引き続きわが国の運命を方向づけていくのである」<sup>6</sup>。しかし、彎曲した革命精神は一党独裁体制を基盤とする、ホセ・パスコンセロスの言葉を借りれば、「集团的ポルフィリオ・ディアス体制」と名付けられる社会の変革をめざす勢力グループの圧力団体、支持者と労働者を機構別に制度化した組織をつくり、そこからの要求を呑みこんだ連合体のような政党、制度的革命党（PRI）を1946年に誕生させた。この時点はエンリケ・クラウセによれば「新たな反民主主義の体制護持秩序をつくり出した」という<sup>7</sup>。その政党メカニズムは周知のように2000年に亀裂を生じて国民行動党（PAN）に政権を譲った。2012年にPRIが政権を奪還したあとに、新左翼政党、国家再生運動（MORENA）は二大政党間の勢力闘争に終焉を告げて、2018年から支持基盤の脆弱性を抱えながら、レヘネラシオン（再生）という、革命運動家フローレス・マゴン兄弟が新聞『レヘネラシオン（Regeneración）』を創

刊してメキシコ革命運動を扇動した改革精神を党是として、現在までメスティソ国家の変革を強靱に押し進めている。

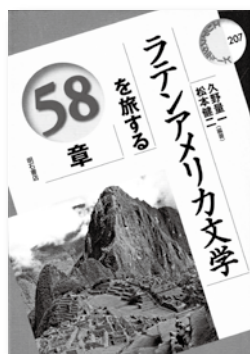
2024年のメキシコ大統領選挙は6月2日に実施された。次期政権を担う政党の選択と国会での政党別議席獲得数と州知事の選出が注目されていたが、2000年に71年ぶりにPRI以外の大統領が当

選したときの反響を凌駕し、与党MORENAのクラウディア・シェインバウム・パルド大統領が選出された。この国で性差の視点で読み解くと何が見えるのか、中南米諸国ですでに就任した女性大統領との対比、そして、ホセ・バスコンセロスの『宇宙的人種論』で説くメスティソ論などを反芻させる歴史的変遷となった。

- 1 エンリケ・クラウセ (2004) 『メキシコの百年 1810-1910 一権力者の列伝』大垣貴志郎訳、現代企画室、10-11 頁。
- 2 クラウセ、前掲書、19 頁。
- 3 大垣貴志郎 (2023a) 『物語メキシコの歴史 一太陽の国の英傑たち』中公新書、第3版、iv-v 頁。
- 4 大垣貴志郎 (2023b) 『メキシコ 一時代の痕跡と歴史認識』行路社、142-143 頁。
- 5 大垣 (2023b) 前掲書、36-37 頁。
- 6 大垣 (2023b) 前掲書、160 頁。
- 7 大垣 (2023b) 前掲書、174 頁。

(おおがき きしろう  
京都外国語大学 名誉教授)

## ラテンアメリカ参考図書案内



### 『ラテンアメリカ文学を旅する 58 章 (エリア・スタディーズ 207)』

久野 量一・松本 健二編著 明石書店

2024 年 5 月 381 頁 2,000 円＋税 ISBN 978-4-7503-5775-1

ラテンアメリカ文学というとわが国ではスペイン語・ポルトガル語で執筆されたものを指すことが多いが、本書ではそのほか英語、フランス語や地場・先住民言語で書かれたもの、南北アメリカやカリブ海諸島で書かれた作家のものまでを網羅した、多様さが際立つラテンアメリカ文学を読もうとする人のためのハンドブック。まず日本におけるラテンアメリカ文学の受容史を述べ、ラテンアメリカ文学の出発点と考える「コロンブス航海誌」・新大陸に渡った欧州人が遺した記録クロニカから始め、征服・植民地時代から 21 世紀に至るラテンアメリカ文学を 58 章に分けて、各章で作家の生誕年を基準に作家や具体的な作品の紹介・解説している。

本書の特徴は取り上げたそれぞれの作家の略歴・作品内容の紹介を羅列したものではなく、ラテンアメリカ文学の魅力を翻訳者・研究者が、作家が生きた具体的な作品の場所、言語、背景となる社会、歴史を熱い思いを込めて、多くの執筆者は現地をも訪れて執筆している。これにラテンアメリカ文学に興味を持ち始めた読者に作品を読み始める入り口・関連知識となる 6 本のコラム、巻末に各章に対応した文献案内も付されている。

(桜井 敏浩)